

# *The Return to Japan* (1945) に見る 終戦直後における米国プロテスタント指導者の 国境を超えるキリスト教理解

池 端 千 賀 子

*The Return to Japan* を見ると、戦後間もない時期に一般市民として初めて占領下日本を訪れた四人の米国人プロテスタント指導者たちは、帝国主義的な勝者母国のキリスト教に距離を置き、一般的な「西洋の」、又は「米国の」キリスト教という理解に対して、キリスト教を米国や日本という国家と超える宗教であると理解していたことがわかる。教派を超えて日本における宣教の業を日本人同胞と共に担うという目的をもって来日した彼らは、キリスト教信仰を国家の枠に囚われない従来よりも包括的でより平等な関係を構築するものとして理解していた。

## はじめに

第二次世界大戦後の占領下日本において、いわゆる「キリスト教ブーム」が起こった。多くの米国人宣教師の流入、占領軍の、特にダグラス・マッカーサー連合軍最高司令官 (General Douglas MacArthur) の意向を感じ取り180度態度を変えた日本政府やメディアの影響もあって、これまで敵性宗教として目の敵にされていたキリスト教は、民主化を目指す新しい日本において、特に占領期の前半、自由、平等、民主主義等の戦勝者米国の価値観を反映する好ましい宗教として多くの日本人に（少なくとも表面的には）受け入れられたようにみえた。

一部の研究によると、このキリスト教ブームは、占領軍による日本のキリスト教化政策により起こされたものであり、戦前から続く米国による文化帝国主義の一例であるとされる。日本の非軍事化と民主化を掲げ、宗教の分野においては信教の自由と政教分離の実現を目指していた占領軍が発した神道指令をはじめとする宗教政策は、「日本の」神道を冷遇し、占領軍の宗教である「米国の」キリスト教を優遇したものであり、さらには敗者となった日本の伝統文化をないがしろにし、勝者である米国の文化を押し付けたと主張するのである<sup>(1)</sup>。

しかし、これらの主張が前提としているのは、「日本の」神道、「米国の」キリスト教といった国家と宗教を単純に結び付けた二分法的な考え方であり、占領期に起こったことの一部を表しているに過ぎない。実際は、日本人キリスト教者の存在と彼らの国家を超えた活動を見てもわかるように、キリスト教は決して「西洋の」または「米国の」宗教ではなく、日本人キリスト教者は、必ずしも西洋化された日本人でもなければ、日本化されたキリスト教の信者でもなかった<sup>(2)</sup>。

キリスト教を従来の西洋の枠を超える宗教として捉えなおそうとする「ワールド・クリスティアニティー」(World Christianity)の分野において発表されている数々の研究によれば、西洋の枠に囚われないキリスト教信仰の在り方は、日本人のような「非キリスト教国」とされている国のキリスト教者のみならず、西洋のキリスト教者においても見られ、キリスト教が国の枠組みを超える宗教であることが例証されている<sup>(3)</sup>。

前述のように、占領期は、マッカーサーやトルーマン大統領 (President Harry S. Truman) の言説を見れば、米国帝国主義の延長として、またキリスト教が米国化されようとした時代として理解することも可能だが、一部の米国人キリスト教者の言説を見ると必ずしもそうではなかったことがわかる。本研究ノートにおいては、第二次世界大戦終了直後に一般市民として初めて占領下日本を訪れた四人の米国人プロテスタント指導者たちが訪問後に書いた報告

書 *The Return to Japan: Report of the Christian Deputation to Japan October-November* (1945) を資料として、彼らがキリスト教をどのように理解していたのかを分析し、彼らを含む米国キリスト教者が、後の占領政策、特に教育・宗教分野において、どのような影響を及ぼし、どのような役割を果たしたのかを理解する一助とすることを目的とする。本資料は、全十章、序論と結びを含めて全64頁からなる短い報告書であるが、戦後の最も早い時期に、占領下日本を訪れた超教派の米国教会団体の代表を務めていたキリスト教者によって書かれた資料であり、彼らが、日本人キリスト教者だけでなく、マッカーサーをはじめとする GHQ のリーダーたち、及び幣原内閣総理大臣をはじめとする日本の政治指導者たちと面談していたことからわかるように、戦後の占領期政策、特に宗教や教育分野での立案に大きな影響力を持っていたと考えられる。実際、報告書の巻末には、勧告 (recommendations) として、聖書や救援物資の早期送付が促されており、それらは速やかに実行に移されている。また、これらの勧告は、彼らの訪日前から綿密に準備されていたことがうかがい知れることから、米国人による戦中から戦後にかけての日本宣教の連続性を示す資料の一つとしても注目に値する。今回はそのような報告書全体から、上記で触れた米国人キリスト教指導者たちのキリスト教理解が表れていると思われる箇所のみを取り上げる。

## 報告書

占領期がいかに大きな転換期であったとしても、その他の全ての時代がそうであるように、孤立した時代として取り扱うべきではない。日本におけるキリスト教宣教も例外ではなく、それは戦後突如戦勝国である米国側から一方的に始まったものではなかった。資料 *The Return to Japan* (1945) は、まずキリスト教の日本宣教は、戦前から日本人と米国人との共同作業として行われて

きたものであることを示している<sup>(4)</sup>。

日本軍による真珠湾攻撃から7か月さかのぼる1941年4月、8人の日本人キリスト教指導者たちが17人の米国人キリスト教指導者たちと会うためにカリフォルニアのリバーサイドという町を訪問し、次回は米国の代表団が日本を訪れる約束を交わしていた。二国間のキリスト教者たちの交流は、真珠湾攻撃後の戦争の激化に伴い4年余りに亘って中断したが、終戦後間もない9月上旬のあるラジオ放送をきっかけに再開した。東京から流されたその放送の話者は、キリスト教教会合同運動団体であった日本キリスト教連盟元総書記の都田恒太郎で、彼は1941年のリバーサイドでの集会に言及し、戦前の約束通り米国代表団の日本訪問を訴えているのであった。その放送の三日後、ダグラス・ホートン<sup>(5)</sup> (Dr. Douglas Horton)、ジェームス・ベーカー<sup>(6)</sup> (Bishop James C. Baker)、ウォルター・ヴァンカーク<sup>(7)</sup> (Dr. Walter W. Van Kirk)、ルマン・シェーファー<sup>(8)</sup> (Dr. Luman J. Shafer)ら四人が、「日本にいるキリスト教信者仲間との直接対話再開のため、イエス・キリストにある生きた霊的団結の絆を強固にするため、及び共通の課題である超教派の教会の形成 (the common tasks of ecumenical Church) を協議するため」日本訪問団代表に任命された<sup>(9)</sup>。

四人のメンバーは、約一か月後の10月21日にサンフランシスコのハミルトンフィールド空軍基地から、軍人以外の一般市民として初めて日本に向かって旅立った。到着後、彼らは日本駐在のアメリカ陸軍により日本国内における移動や宿泊において特別待遇を受けたが、旅費やその他の費用は全て本国の教会の負担によるものであった。後の報告書においても、「我々は、政府にも軍にも後援を受けなかった。それゆえに我々の訪日は、世界における最も崇高且つ唯一の行いはイエス・キリストに倣うことであるとの信仰によるものであった。」と記している。彼らは、「教派、国家、人種から生じたこれまでの様々な罪を認識すると共に、イエス・キリストの名を追い求める者」として「戦争をもってしても寸分も変化することのない日本人キリスト教者に対する愛から生まれ

た自信」をもって来日し、それを「イエス・キリストにあるより良い未来の計画において、日本人キリスト教者と共に労する特権」だと考えていた。彼らは、自身を「教派も国家の境界もない超教派の教会の代表」であると自負していた。実際、報告書の序論において、「我らの国籍は、地理的分断も人種による分断もない天にある。……キリストにあるという者は、人種や国籍に関係なく、戦争もその悲惨な惨禍も、私たちを神から、又互いから引き離すことはできないということを示そうではないか。」と高らかに宣言している<sup>(10)</sup>。

東京に到着後、四人は、約三週間の滞在期間中、東京都とその周辺地域、名古屋、京都、神戸、大阪を訪れ、(占領軍機で上空から広島と長崎も訪れている。) すさまじいほどの荒廃を目の当たりにする。そして、信者であるなしを問わず多くの日本人(キリスト教指導者では、賀川豊彦、小崎道雄、河合道らと、非キリスト教者では、幣原喜重郎内閣総理大臣、前総理大臣の東久邇宮稔彦、文部大臣の前田多門、外務大臣の吉田茂ら政府の高官、昭和天皇そして教会に集う多くの一般キリスト教者たち)に面会する。彼らははじめ、これほどの荒廃を日本中にもたらした勝者の国の市民である自分達がどのように日本人に受け入れられるのかを心配していたが、東京に到着して間もなく Y. M. C. A. (キリスト教青年会)の建物で、斉藤惣一ら日本人キリスト教者とほとんど無言で握手を交わした瞬間、「私たちのイエス・キリストにある親交は変わりなく、二国間のキリスト教者の交わりの中断は直ちに修復されると悟った。」としている。さらに、霊南坂教会で持たれたベイカー監督と小崎牧師によって執り行われた聖餐式においては、式のためのパンを調達できず、四人の宿泊先であった第一ホテルを訪れた小崎の要請によりホテルの台所にあった米軍から配給されたパンを使用して式が挙行された。聖餐式は、聞きなじんだ言葉を用いて執り行われたが、それらの言葉は言外に、「神の福音は国の違いを超え、キリストの教会に勝るものは実に何も存在しないことを知らしめる悔い改めと勝利と希望」を語っていたと記録されている<sup>(12)</sup>。その後の日曜日には、四人はそ

れぞれ東京にある教会で、日本人の会衆に向けて礼拝の説教を行った。各教会で語られた説教題は全て、「キリストにあって一つ」であった。彼らはその後同じ説教を、京都、神戸、大阪でも行ったが、どの場所においても日本人キリスト教者の説教に対する肯定的な反応を目にして、「この時ほどキリストにある一致の真実性を悟ったことはない。」と回顧している<sup>(13)</sup>。

この聖餐式における「悔い改め」は、戦争の非を敗者日本に一方的に求める一般論と違って、日米双方のキリスト教者による戦争への関与に向けられていたと考えられる。彼らは、戦時中信仰のゆえに戦争に反対し投獄された日本のキリスト教者たちは少数で、大半が軍事政権主導の戦争に加担していたこと、又は日本キリスト教者が軍に協力して中国やその他のアジアの地域に宣教師を送り宣撫活動を行っていたことを認識していた。しかし、彼らは、日本人の同胞に対して同情を示し、彼らが困難な状況下にあっても信仰を守り通したことを「良い戦いをした」と称えた<sup>(14)</sup>。

それは、彼ら自身の苦しい体験に基づいていた。パーカーは、戦争は日本の教会を物質的に荒廃させただけでなく、霊的にも悪影響をもたらし、その霊的荒廃は、「日本の教会の負の歴史である」と言う。しかし、それは決して日本人キリスト教者だけのものではなく、彼ら自身1917年から翌年にかけて経験したことだと続ける<sup>(15)</sup>。1914年に第一次世界大戦がヨーロッパで起こった際、アメリカの教会は平和主義に立ってウィルソン政権の中立を指示していたが、ドイツの力が英国を圧倒するにつれて教会内においても非人間的なドイツを力で打ち負かすことを主張する意見が出現し、1916年の大統領選挙でウィルソンが再選されると参戦をめぐって教会内でも見解が分かれるようになった。1917年4月のアメリカ参戦について国民の大半は消極的であったが、参戦を支持したのは新聞とキリスト教界であった。教会において平和中立派は影を潜め、牧師たちはこぞって愛国主義を唱えて戦争を支持する説教をし始めたのである。クエーカーのように非戦を主張し続ける人たちもいたが、彼らは少数派で、大多数の

教職者と信徒は政府の戦争宣伝に加担したのであった。<sup>(16)</sup>

一方、第二次世界大戦においては、真珠湾攻撃後、教会内の平和主義運動は影を潜めたものの、参戦は「不必要な必然」として認めるものであり、教会として戦争を賛美することはなかった。第一次世界大戦時とは違って、米国キリスト教界は、第二次世界大戦においては米国も悔い改めが必要だと認めていた。<sup>(17)</sup> 実際、報告書においてトルーマン政権やマッカーサーを直接非難することはなかったが、ペーカーは、広島と長崎の悲惨な現状に触れ、米国政府は戦後徴兵よりも平和を計画する政策を施行するべきであると主張し、国民皆兵制を提案する政府を非難して平和の重要性を説いている。<sup>(18)</sup>

戦時中の宣撫活動についても、彼らは非難するよりも理解を示している。戦時中結成された日本キリスト教団が、100人以上もの日本人宣教師を中国、その他のアジアの地域に派遣していたことに触れ、いくつかの例を除いては、これらは日本帝国の手先としての活動ではなく、福音を伝える活動であったと考えられると記している。そして、彼らが以前にも増して日本人の宣撫活動について同情的である理由として、彼ら自身が今まさに、戦中の日本人キリスト教者同様に、宣撫活動に携わっているからだ、自らの訪日を戦中の日本の宣撫活動に照らし合わせて客観的に観察している。しかし、(日本人の宣撫活動がそうであったであろうように) 日本をアメリカの政治勢力下に取り込もうとしている国家の市民でありながら、彼らの唯一の目的は、政府のそれと違って、キリストの教会を発展させることだというのである。そして、今や中国をはじめアジア諸国での宣教活動ができなくなっている教団に対して、平常に戻ったアジアにおいては、日本の教会は再び宣教活動を担うことができるであろうと希望を述べている。<sup>(19)</sup>

メンバーの一人であったヴァンカークは、日本人キリスト教指導者との直接の面会において、戦時中米国人キリスト教者達が必ずしも米国政府と戦争に関する意見を共有していたわけではなかったと述べ、米国人キリスト教者は、不

十分ではあったが、米国兵による日本兵の死体を汚す行為への反対、反移民法廃止への支持、サンフランシスコで開催された国連の予備会議における正義と恒久の平和等のために働きかけたと伝えた。1941年以降、米国にいる同胞について情報を得ることが不可能になっていたこれらの話を初めて聞いた日本人キリスト教者たちは、米国の教会が不十分であったにせよ政府をより高い理想に向けて導こうとしていたことを知り、大いに力づけられた。キリストにあるその「より高い理想」を、彼らも共有していたからである。ある日本人キリスト教者は会の終わりに、彼らとの非公式な会話において「これまでで最も幸せな一日だった」と伝えた。<sup>(20)</sup>

日本人は、キリスト教者はもちろんのこと、非キリスト教者も四人を歓迎した。『日本タイムズ』の記事は、「四人の著名な米国人宗教指導者による訪日は、日本人キリスト教者のみならず、日本国民すべてが関心を持つべき事柄である。」と述べ、その理由を「代表団の公の目的は、日本人キリスト教者との交流を再開し、日本の宗教界の状況について調査することであるとしているが、この訪問の影響力は単にキリスト教会に止まらず、日本が平和を愛する人々との国際的な交流に再び立ち返る大切な第一歩として刻まれる。」と記している。さらに記事は、「他の全ての国と同様、米国には暗い過去も欠点もあるが、この国の理想主義、人道主義、寛容、平和の探求等の光り輝く価値の類まれなる強みは、その大部分が米国の宗教的土台（キリスト教）の賜物である。」と述べ、「少数のキリスト教徒らしからぬ行いをする信徒の存在にもかかわらず、米国におけるキリスト教会がいかに正義、自愛、人種的少数派の権利や世界平和の最も信頼のおける擁護者であるかを認識すべき」だと続ける。さらに、彼らが帰国して日本の報告をすれば、二国間の友好的な関係の修復に大きな影響があるはずなので、信条や信仰に関係なくすべての日本人は彼らを歓迎すべきであると強調する。非キリスト教者の日本人は、キリスト教を米国という国家と結び付けて理解し、手のひらを返したように「米国の」宗教を持ち上げ、占

領軍をはじめとする勝者にこびているようにさえ見える。

しかし、同じ歓迎のメッセージにおいても日本人信者はキリスト教を「米国の」宗教ではなく二つの国を結ぶものとして理解していたことがわかる。同志社大学第十一代総長であった牧野虎次は、代表団に対して「キリストにある兄弟」と呼びかけ、彼らの訪日感謝し、訪日が、日米キリスト教者の強固で決して崩壊することのない愛の結びつきと、キリストの名における両国間の軍の圧政下にあっても決して弱まることのない深い友情を示していると述べる。さらに牧野は、戦中の米国在住日本人に対する米国人キリスト教者の様々な保護に対しても厚く感謝を述べ、米国と日本のキリスト教者は、両国の友好関係の修復において責任を担っているとし、主イエス・キリストの名において共に本来のキリスト教徒の交わりを再建しようと訴えかけている。<sup>(22)</sup>

報告書の最後では、占領下で民主化を目指す日本がキリスト教宣教にとっていかに大きな機会であるかを述べてはいるが、キリスト教を無理やりに日本に押し付けようとするような気配は感じられない。日本の伝統的な宗教とされている神道についても、その存在を頭ごなしに否定するのではなく、政府が国教扱いをやめ、全ての学校での神社参拝の強要をするようなことがなくなれば、「日本における一つの宗教」として存続するだろうとしている。キリスト教宣教については、キリスト教が明治初期のように自由に宣べ伝えられることを望み、キリスト教教育推進のための優れたキリスト教大学を東京と京都に設立することなどへの展望を述べてはいるが、それらの活動を主導するのではなく、あくまでも援助者として日本人キリスト教者と共に宣教を行おうとする姿勢を示している。宣教師を送る時期や人数についても、各地で幅広く日本人キリスト教者に意見を求め、様々な意見からの結論として、「日本の教会が我々に求めているのは、我らの心からなる思いと祈りと金銭的な援助、そして少数の経験豊かな宣教師をまず送り、後に日本の教会からの要請があれば数を増やすことだ。」と締めくくっている。<sup>(23)</sup>

## むすび

これまで見てきたように、戦後間もない時期にあっても四人の米国人キリスト教者は、一般的に理解されている「日本の」神道、「米国の」キリスト教といった国家と宗教を結び付けた二分法的な考え方を持っていなかった。マッカーサーやトルーマンといった政治的指導者とは違い、彼らは帝国主義的な勝者母国のキリスト教に距離を置き、キリスト教を米国という国家を超える宗教であると理解していた。戦前から共同作業として行われてきた日本における宣教の業を、キリストに倣うものとして再開するという目的をもって訪日した彼らは、軍国主義になびいた敗戦国日本のキリスト教者を責めることなく、「キリスト教信仰と戦争」という難問に共に直面した経験を共有し、主イエス・キリストにある同胞として認め、親交を再開し、復興の援助を申し出た。

キリスト教を西洋の枠を超えた世界宗教として捉えなおそうとするワールド・クリスティーの分野で近年蓄積されてきた多くの研究が示すように、国家の枠に囚われないキリスト教信仰は、日本のような「非キリスト教国」のみならず、ヨーロッパ諸国や米国においても存在していた。筆者は、本稿における第二次世界大戦終了直後に一般市民として初めて占領下日本を訪れた四人の米国人キリスト教指導者たちのキリスト教理解もその一例であると考えている。今後は、今回大まかにしか取り上げられなかった彼らの報告書を精読し、彼らのキリスト教理解をより深く分析し、彼らのような米国人キリスト教者が、後の教育・宗教分野における占領政策においてどのような影響を及ぼし、どのような役割を果たしたのかを明らかにしていきたい。

## 注

- (1) 福田繁「検証 GHQ の宗教政策」井門富士夫編『占領と日本宗教』（東京：未来社、1993）541-542. 西鋭夫『マッカーサーの「犯罪」』上巻（東京：日本工業新

- 聞社、1983) ii. Ray A. Moore, *Soldier of God: MacArthur's Attempt to Christianize Japan* (Portland: MerwinAsia, 2011), 139-141.
- (2) Chikako Ikehata, "'But Our Citizenship Is in Heaven': Making Christianity 'Japanese' and Transnational, 1895-1945" (Ph.D. diss., Doshisha University, 2019) 参照。
  - (3) Joel Cabrita, David Maxwell, and Emma Wild-Wood eds., *Relocating World Christianity: Interdisciplinary Studies in Universal and Local Expressions of the Christian Faith* (Boston: Brill, 2017); Philip Jenkins, *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity* (Oxford: Oxford University Press, 2011); Lamin Sanneh, *Whose Religion Is Christianity: The Gospel beyond the West* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2003) 他。
  - (4) Douglas Horton, Chairman, *The Return to Japan: Report of the Christian Deputation to Japan October-November, 1945* (New York: Friendship Press, 1945). この報告書は、代表団の代表であったダグラス・ホートンによって執筆され、アメリカキリスト教会最大のキリスト教超教派の団体で、今日の米国キリスト教会全米協議会 (National Council of Churches of Christ) の前身である米国キリスト教会協議会連盟 (The Federal Council of the Churches of Christ in America) と、北米海外宣教協議会 (The Foreign Missions Conference of North America) の会員に向けての報告書として出版された。
  - (5) 当時、世界教会協議会米国支部代表 (The President of the American Section of the World Council of Churches) を務め、訪日代表団においても代表であった。
  - (6) 国際伝道協議会 (The International Missionary Council) 議長。
  - (7) 米国キリスト教会協議会連盟 (The Federal Council of Churches of Christ in America) 国際正義と良心部門 (The Department of International Justice and Goodwill) の事務局長。
  - (8) 外国伝道協議会 (The Foreign Missions Council) 日本委員会 (The Japan Committee) 議長。
  - (9) Horton, *The Return to Japan*, 3-5. 日本語訳は全て筆者による。
  - (10) Horton, *The Return to Japan*, 6-7.
  - (11) James C. Baker, "Inside Japan: Two Months after Surrender," An Address by Bishop James C. Baker to an interdenominational gathering at the First Methodist Church in Los Angeles, 20 November 1945, (Recorder by Sound Scribe), Missionary Research Library, 3. (報告書とは別に、帰国後ベーカー監督がロサンゼルスでのメソジスト教会で開かれた超教派の集会で一般会衆に向けて述べた口頭報告。)

- (12) Horton, *The Return to Japan*, 9-13. 湯浅八郎も1941年のリバーサイド日米キリスト者会議のメンバーであったが、代表団の来日時には彼は戦中に引き続き在米中で、代表団のメンバーが、離れ離れの暮らしを余儀なくされていた彼の妻に湯浅のメッセージを伝えたとある。
- (13) Baker, “Inside Japan,” 15.
- (14) Horton, *The Return to Japan*, 33-37.
- (15) Baker, “Inside Japan,” 10.
- (16) 古屋安雄「アメリカの教会と戦争—20世紀前半における—」『アメリカ研究』1969、3号、55-57.
- (17) 古屋、「アメリカの教会と戦争」、60-62; G. Kurt Piehler, “World War II and America’s Religious Communities” in Stephen J. Stein ed., *The Cambridge History of Religions in America* (Cambridge: Cambridge University Press, 2012); Andrew Preston, *Sword of the Spirit, Shield of Faith: Religion in American War and Diplomacy* (New York: Anchor Books, 2012); John W. Dower, *Culture of War: Pearl Harbor: Hiroshima: 9 - 11: Iraq* (New York: W. W. Norton & Company, 2010) 他。
- (18) Baker, “Inside Japan,” 9.
- (19) Horton, *The Return to Japan*, 38-39.
- (20) Horton, *The Return to Japan*, 14.
- (21) “The Visit of the American Religious Leaders,” *Nippon Times*, November 1, 1945.
- (22) “The Visit of the American Religious Leaders,” *Nippon Times*, November 1, 1945.
- (23) Horton, *The Return to Japan*, 50-59.

(第20期第2研究会による成果)